ISSN 2424-0265
南山大学ライネルス中央図書館カトリック文庫通信
カトリコス No.41 2026.11
NANZAN UNIVERSITY

Katholikos

本を眺める、という「読み方」

奥田 太郎

本には様々な「読み方」がある。速読、精読、積読。速読は、訓練によって身につけられる憧れのスキルであろう。身につければ、本がたくさん読める。では、精読はどうか。ゆっくりじっくり深く本を読み込んでいく精読は、多くの人が考えているよりも厳しい訓練が必要である。私が精読の訓練を受けたのは大学での講読の時間であった。哲学者イマニュエル・カントの主著『純粋理性批判』を読む授業だったが、90分の授業時間を延長して夕方遅くまで続くのが常で、回によっては1センテンスを読み込むだけの時もあった。文構造や語彙、前後の文脈、指示代名詞の指示内容、哲学史に裏づけられた理論的な背景理解などが重なり合うことで、1センテンスを長い時間をかけて読み込むことができる。これは、書かれた意味内容や筋だけを漉し取るように「読む」速読とは対極を成す「読み方」である。内容を頭に入れるのとは違った「読み方」ができるのは訓練の賜物であり、それ抜きにじっと1つの文を眺めていても精読はできない。眺めていると言えば、積読はどうか。積読は、ただ読めない本が机の上に積まれていくだけかと言えば、そうでもない。積読も一つの「読み方」である。読みたい気持ちゆえに、本棚に挿すこともできずに机上に置く。それが続いて気づけば本の山ができている。その山を成す本は、まだ読まれていないのになぜかそれを読みたいと思われている。本棚に入る前の本が机上に積まれている状態と、読みたい本が机上に積まれている状態は、まったく異なる状態である。その本が机上に積まれている時点で、時空を超えて「お前はすでに読まれている。」それが積読の極意である。

さて、もう一つ、重要な「読み方」がある。それは、背表紙読。本の分類法と配架方針が背表紙読に色を添える。多様なジャンルの本を取り揃えた大型書店、そして、売れ筋とは独立に玄人の目で本が収集された大学図書館、これらの書架空間での背表紙読は特に面白い。書架に並ぶ背表紙を端から順に、可能な限りすべて「読む」。分厚くても10cmに満たない幅の中に、本の中身を滲み出させるべく練られた珠玉の言葉が一定の秩序をもってずらりと並んでいる。眺めているだけで世界の広さと深さの一端に触れられる。私が背表紙読を気に入っているのは、背表紙を眺めているだけで、そこに人の思考の尊さ（Dignity）、幅広さ（Diversity）を感じ、そうした膨大な思考の世界に触れられる（Dialogue）からである。これは、ロバート・キサラ学長が掲げる3Dsそのものだとも言えよう。これが背表紙読の極意である。

そうした思考の宇宙は、南山大学ライネルス中央図書館にも広がっている。その目玉である独自のコレクションの代表格が、カトリック文庫。そこに収蔵された「布教用要理解説図版」は、深遠なキリスト教の宗教世界を絵として描き出したもので、この図版に触れる私たちは、一枚の絵をじっくりと精読することもできるし、幾つもの絵の連なりを眺めて背表紙読的に「読む」こともできる。皆さんの心に積読されたこの図版の魅力をカトリック文庫で味わってみてほしい。

（OKUDA, Taro：社会倫理研究所教授）

絵によるカテキズム
―絵は説教と同じである、教え、説教し、感動させる―

はじめに

「カテキズム」は、キリスト教（主にカトリック）において信仰の基本を教えるための教材や教義（カトリック要理）を指す言葉である。そして「絵によるカテキズム」を、南山大学カトリック文庫では「布教用要理解説図版」（以下、「図版」）と名付けている。その資料群をなんと呼ぶべきなのかわからずに仮に付けた名前であるが、名付けてからすでに30年近くが経過している。それはキリスト教の信仰や聖書の著名な場面が描かれた図像で、絵の下部に場面を表す言葉やその注解などが記載されていることが多い。カトリックの信仰とはどういうものであるか、信仰するとはどういうことか、神の啓示はどのようにしてなされ完成されたか、神の啓示はどのようにして人々に伝えられているかなど問答式に展開されているのがカトリック要理であるが、「図版」は文字を理解できない幼児や幼児洗礼の児童、また言葉だけでは理解が難しいあらゆる信徒に向けてわかりやすく教え導く道具として図像が使用されたポスターサイズの資料である。資料は掛図（一枚物・ポスター型）、掛図（一枚物・軸装）、掛図（天綴じ・カレンダー型）のもの、あるいは一枚物・ポスター型が木板に貼られたものなど様々である。それぞれの教会に集う信徒らを教え導くために使い勝手のよい形態に装備されたのであろう。図像の作者の名前が残されていないものも多い。

本学カトリック文庫には8か国（中国、フランス、スペイン、ドイツ、オランダ、アルゼンチン、アメリカ、日本）の「図版」約800点を所蔵している。それらは聖母カテキスタ修道会（現在の聖マリア在俗会）（名古屋市昭和区）より寄贈されたもので、多くは院長ゲオルグ・ゲマインダー神父（GEMEINDER, Georg SVD., 1900-1985）が収集されたということである。ゲマインダー神父は1950年に名古屋市昭和区隼人町に聖母カテキスタ学院を開設し、カテキスタ講習会を開くなど戦後の日本社会に適したカテキスタの在俗修道会設立を計画し、1951年に日本における最初の在俗修道女会「聖母カテキスタ会」を創立した。カトリック教会の「カテキスタ」とはおもに洗礼を希望する人々にキリスト教の概要や要理を指導すること、あるいは指導者そのものを指すそうである。

中国版は本学の設立母体であるカトリック神言修道会（以下、神言会）のトマス・メーガン神父（MEGAN, Thomas M. SVD., 1899-1951）の指示により、当時中国・北京にあった輔仁大学で制作されたものであり、「資料紹介：布教用要理解説図版（王粛達画 北京輔仁大学1939年刊）について」（『南山大学図書館紀要』6, 1999）（以下、「資料紹介」）で詳しく紹介している。そこでは最後が次のように締めくくられている。

> ヨーロッパでは16世紀において、民心説得、布教のための重要な戦術として版画などの複製メディアが使われており、中国や日本など東洋布教においても同様の手法が取り入れられたようである。それぞれの国に派遣された宣教師がどのような図像・どのような場面をその地の民衆にもたらそうとしたのかという視点で「布教用要理解説図版」をみてみると非常に興味深いのではないだろうか。
>
> 「絵は説教と同じである。教え、説教し、感動させる。ことばよりもたやすく心に浸透し、行動させる」というボローニャの司教の言葉は示唆に富む。

『南山大学図書館紀要』No.6が発行された1999年の時点では、「図版」の整理や図書館システムへの登録は未着手の状態であった。その後に新たにカトリック文庫に加わった「図版」も含めて整理作業を終え、図書館システムに登録して利用に供するまでにはそれなりに長い年月がかかったことになる。作業を終えた現在、「図版」の閲覧を目的として研究者が来館されたこともあり、通常文字資料を扱っている私たちは、改めて図版資料の持つ力や価値に目を向けることになったのである。

中国版を調査してからあっという間に30年近くの歳月が過ぎてしまった。その時の担当者はすでに職場を去っている。今回、新たなメンバーで各国版の調査にようやく着手することになり、まずはその概略を本誌に記し、今後の更なる調査の足掛かりとしたい。

1. カトリック文庫に所蔵する8か国10種の「図版」（以下、単に“図版”）について

所蔵する図版の出版国（記載された言語を含む）は8か国にわたっている。8か国10種の図版のうち、シリーズとしての図版資料をすべて所蔵しているのは中国版（全35点）のみである。3種所蔵しているドイツ版のうちのひとつは一連の番号が振られているがはっきりしない。またオランダ版『Bellarminus bijbelplaten（ベラルミヌス聖書挿絵）』は旧約聖書と新約聖書に分かれているうち、旧約聖書の図版（全30点）は揃っている。アメリカ版の全容は不明であるが、各図版13枚4点の天綴じ資料としては揃っているように思われる。アルゼンチン版は全200点と思われる『Láminas Catequisticas（カテキズム用プリント）』のうち、4点欠けているがほぼ揃っており全容が把握できる。

カトリック文庫に所蔵する図版の概略は以下の表のとおりである。

No	出版国	図像の作者	出版地 出版者 出版年	点数	資料形態 サイズ（cm） 縦×横	備考
1	中国	王肅達 (1911-1963)	[北京] [輔仁大学] [1939]	34 [35]	掛図（一枚物・軸装） 91×53.5（61.6×43.8）	【請求記号】CAT3/197/1-1-2/v.0-1～35（v.0-4は欠） ・9枚の手書きの解題あり
				35 [35]	掛図（一枚物・ﾎﾟｽﾀｰ型） 77×53.6（61.8×43.9）	【請求記号】CAT3/197/1-2-2/v.0-1～35 ・軸装と同じ図像で資料形態が異なる
2	フランス	不明	Paris Maison de la Bonne Press [19—]	17 [68]	掛図（一枚物・軸装） 71.3×48.7（65.1×47.4）	【シリーズ名】『Catéchisme en images』 【請求記号】CAT3/197/1-1-4/v.0-1-2～50 ・No.2, 3, 5, 7, 11-13, 19-22, 26, 27, 32, 34, 41, 50を所蔵
3	スペイン（ドイツ）	HEINEMANN, Johann Nepomuk (1817-1902)	出版地不明 出版者不明 [19—]	23 [40]	掛図（一枚物・ﾎﾟｽﾀｰ型） 35.9×44.8（30.8×36.1）	【請求記号】CAT3/197/1-2/v.0-1～23 ・ドイツ版のスペイン語版であると思われる
4.1	ドイツ	SCHUMACHER, Philipp (1866-1940)	Düsseldorf (Trier) Mosella-Verlag c1913	60 [60?]	掛図（一枚物・軸装） ●横長版 55.2×80（46.6×71.7） ●縦長版 79.4×55.8（71.1×47.5）	【請求記号】CAT3/197/1-1-3/v.0-2-1～60 ・裏面に日本語タイトルが記載されているものあり
4.2	ドイツ	FUGEL, Gebhard (1863-1939)	Munich Verlag Ars Sacra Josef Müller C[193-]-1939	37 [100]	掛図（一枚物・軸装） ●横長版 80×82.5（60.5×79.9） ●縦長版 95.4×61.7（80.3×60.3）	【請求記号】CAT3/197/1-1-3/v.0-1～37 ・裏面に日本語タイトルが手書きされた紙片が貼付されているものあり
4.3	ドイツ	MINK-BORN, Mate (1882-1969)	Stuttgurt Hermann Appel [1929-1940]?	85 [151?]	掛図（一枚物・ﾎﾟｽﾀｰ型） 59.9×89.8（49.9×80.2）	【シリーズ名】『Künstlerische Biblische Wandbilder nach Gemälden von Mate Mink-Born』 【請求記号】CAT3/197/1-2-3/v.0-1～85 ・多言語表記（独・英・蘭・仏・西）
5	オランダ	HORSTHUIS, Ben (1918-1998)	Utrecht St. Gregoriushuis [1952] ?	30 [60]	掛図（一枚物・ﾎﾟｽﾀｰ型） 80.5×67.4（65.1×50）	【シリーズ名】 『Bellarminus bijbelplaten』 【請求記号】CAT3/197/1-2-5/v.0-1～30 ・シリーズの旧約聖書部分のみ所蔵 ・多言語表記（独・英・蘭・仏・西・馬・羅・葡・伊・エスペラント語）
6	アルゼンチン	[Ⓜ ubiau]他	[Buenos Aires] Casa del Catequista [19—]	196 [200?]	掛図（一枚物・ﾎﾟｽﾀｰ型） 73.3×54.4（61.1×46.3）	【シリーズ名】『Láminas Catequisticas』 【請求記号】CAT3/197/1-2-6/v.0-1～196 ・No.119, 189, 191, 195が欠
7	アメリカ	SOORD, Alfred Usher(1868-1915)他多数	Effingham, Ill Co-op Parish Activitites Services [192-]-[194-]	52 [52]	掛図（天綴じ・ｶﾚﾝﾀﾞｰ型） 84.6×53.7（58×48.7）	【請求記号】CAT3/197/1-1-5/v.0-1～4 ・掛図4点（13枚×4）
8	日本	作画者多数	東京 日本日曜学校協会 [195-]-[196-]	65 [不明]	掛図（天綴じ・ｶﾚﾝﾀﾞｰ型） 78.5×53（58.4×48.6）	【請求記号】CAT3/197/1-1-1/v.0-1～4 ・掛図3点（26枚×2 / 13枚×1）
				166 [不明]	掛図（一枚物・ﾎﾟｽﾀｰ型） 木板（両面貼付・ﾎﾟｽﾀｰ型） 77.2×51.6（58.6×48.4）	【請求記号】CAT3/197/1-2-1/v.0-1～142 ・木板の表裏に1枚ずつ貼付（vol.0-34まで、vol.27は片面無）

・所蔵点数の[]内はシリーズとしての図版総数
・サイズの（）内は図像のみの採寸値（飾り枠を含む／各国版の先頭資料から採寸）
・請求記号は今回の調査に基づき適切なかたちに後日修正予定

2. 各国の「図版」（以下、単に“図版”）について

（1）中国版：中国の風俗を巧みに取り入れた中国の人々ための図版

中国版は前述のとおり本学の設立母体である神言会が当時運営していた北京の輔仁大学の印刷局で、神言会神父らの尽力によって制作されていること、また全35点の図版をすべて所蔵していることから、カトリック文庫において特に貴重な資料であると言えよう。また中国版の最大の特徴は、1922年に初の中国駐在の教皇使節として着任したチェルソ・コスタンティーニ大司教（COSTANTINI, Celso Benigno Luigi, 1876-1958）の「宣教地において宣教師が遭遇する最も深刻な障害の一つは、彼が説教する宗教が現地の人から『外国のもの』と見なされることである」との主張に基づき、『中国のもの』となっていることである。キリスト教の信仰と聖書の著名な場面が、中国の風俗を巧みに取り入れた形で描かれている。絵の下部には場面を表す言葉とその注解、そして聖書の出典が中国語で記されている。総数35点が揃った状態で、一部変色した箇所も見受けられるが、全体に明るい色調で統一された美しい図像である。カトリック文庫には軸装とポスター型を所蔵しているが、軸装は1点欠けている。詳しくは「資料紹介」を参照されたい。



建定聖體（最後の晩餐）

・描画 王肅達（WAN, Su da, 1911-1963）について

図版のうち一部に、作者のサインと同一（「肅達 [Su da]」）の印章が添えられている。王肅達は1911年北京に生まれ、幼少の頃より絵を描く才能を発揮していた。16歳で商業学校に入学、絵を描くことを中断していた時期もあるが、21歳の頃に再開した。1933年に輔仁大学芸術学部に入学し、専門的に絵を学び始め、1936年卒業後に輔仁中学校の美術教師になる。1937年に受洗、霊名はGeorge（喬治）であった。以降、専らキリスト教絵画を描くようになり、1939年にトマス・メーガン神父に招かれて河南省新郷県にて35点のシリーズを制作した。3年後、北京の輔仁に戻り、中国キリスト教芸術の発展に貢献した。

・出版について

輔仁大学は、1925年にアメリカのベネディクト会によって北京に創設、1931年に南京中央政府によって正式に大学として認可され、1933年に教皇庁により神言会に委譲された。

1930年、同大学では中国絵画のための私立大学の学部としては中国唯一となる芸術学部が開設された。コスタンティーニ大司教に才能を見出された陳縁督（Ch'en, Yüan tu, 1903-1966）が美術教授に任命されるとその周囲にはキリスト教画家の一団が形成される。それに伴い中国芸術とキリスト教の融合による新しい芸術が中国の教会にゆるやかに浸透し、輔仁大学印刷局では新しい芸術を普及させるために絵画の複製が大量に印刷されるようになる。1937年以降、神言会修道士セヴェリン・タウバー（TAUBER, Severin, 1876-1974）が大学印刷局の責任者となり、絵画印刷に大きく貢献した。王肅達の原画はもともと軸装であったらしく、6色刷りで相当数印刷発行したという。

輔仁大学は日中戦争の困難な時期（1937-1945）にもその活動を進展拡張し、1938年には中国人司祭養成のため神学院を設けたが、1949年の共産主義政権の樹立以降、大学は共産党の政治的宣伝活動の拠

点となってカトリック教育事業は次第に困難な状況に陥り、1950年に共産主義政府によって接収され、1952年公式に閉鎖された。その後中断期間を経て、台湾の台北県で復興し現在に至っている。

(2) フランス版：トリエント公会議のカテキズムによる多元的コンポジションの図版

フランス版は1893年にMaison de la Bonne Presseから出版された『Catechisme en images（図解カテキズム）』の総点数68点の図版資料のうち、異版だと思われる17点を所蔵している。図版は麻の布で裏打ちされ上下に木製の軸棒が付いた掛図の形態で、相当に使用された感がある。



3eme et 4ème Comm ts de l'eglise
（教会の第３および第４の制令（おきて））

これらの図版は1545年から1563年にかけて北イタリアのトリエントで開催された公会議のカテキズムに沿ったもので、第1部は「信徒新条」（No.1～18、No.4は4a、4b、4cの3点に分かれている / 20点）、第2部は「秘跡」（No.19～25 / 7点）、第3部は「十戒」（No.26～51 / 26点）、第4部は「祈り」（No.52～66 / 15点）となっている。トリエント公会議はプロテスタントの宗教改革に対して、カトリック教会の教義を再確認しつつ教会改革を決定し、カトリック教会の刷新と自己改革の原動力となったとされる第19回公会議のことである。カトリック文庫に残されている図版には、第4部の「祈り」は1点も含まれていない。

『Catechisme en images』は最初に図版資料のみが高額な価格で出版されたにもかかわらず2万部近くが売れたことから、次にサイズを小さくして単色で印刷し、さらに各図版資料の説明文を付けた手頃な価格の普及版が出版された。普及版の初版は1908年に刊行され3年後には出版部数が20万部に達した。

パリ外国宣教会のアドルフ・ワグネル神父（WAGNER, Adolph, 1863-1932）が翻訳して日本で出版した『公教要理図解』（ペ・マルモニエ, 1913）は上記普及版の日本語訳であると思われる。カトリック文庫では、永田辰之助編『公教要理図解』（（大阪）天主公教会, 1927）を所蔵しているが、これは前出の資料が絶版になったため、1924年に東京で開催された司教会議の決議に基づいて編集された公教要理やその他の教理書を参考に再編集したものであることが同書のまえがき部分に記されている。ちなみに編者の永田神父（1862-1937）は1935年6月にカトリック夙川教会で遠藤周作とその兄正介に洗礼を授けた神父としても知られている。



永田辰之助編『公教要理図解』
（[大阪] 天主公教会 , 1927）

フランス版はひとつの図像が多元的に構成されていることが特徴で、礼拝堂を模した上・中・下段の構図に旧約・新約聖書の様々な場面の他、キリスト教徒や司祭の日常生活や教会の歴史までが描かれているものもある。また教会の主日や祝日の様子が渦を巻くように描かれた構図の中央に地獄が赤く描かれ、享楽に耽る人々がそこに落ちていくさまが描かれた図版もある。

フランス版の図版は、2020年に現在の技術で復元してフラ

ンスで再出版されたことから、我々は美しい状態で今も目にすることができる。

・描画について

1912年に出版された解説付きの普及版『Catechisme en images』の序文には「これらの見事な図版資料を制作するには、最も腕の立つ芸術家たちを起用し…」とあるので、68点の図版は複数の作者によって制作されたと思われるが詳しいことは不明である。

・出版について

出版社Maison de la Bonne Presseは、1845年に聖母被昇天アウグスティノ会を創設したエマニュエル・ダルゾン神父（D'ALZON, Emmanuel, 1810-1880）の推進のもと、1873年7月にパリで設立された。設立の目的は、カトリック信徒のためのあらゆる種類の新聞、出版物、書籍、著作を出版することであったが、その根底には19世紀末のフランスで進められていた教育改革、すなわちカトリック・キリスト教会の支配下から教育を脱却させ、国家に還俗させることへの対抗があった。教育改革により、学校からの教会権力の排除とともに宗教教育すなわちカテキズムも学校から排除されることとなり、学校では教理教育と最も関連の深い道徳教育は世俗道徳および公民教育として進められることとなったのである。

創設当初、Maison de la Bonne Presseはフランスで初めてのカラーの週刊誌『Le Pèlerin』を発行する。これは実際のところ巡礼のためのニュースレターで印刷部数は4千部程度であったが、2年後には8万部以上に成長した。フランスのカトリック司祭でありジャーナリストであるヴァンサン・ド・ポール・バイイ神父（BAILLY, Vincent de Paul, 1832-1912）は1860年に同修道会に入会するとともに、父親の跡を継いで印刷業者となり、1880年に『La Croix』を創刊した。図版資料の印刷・出版にも深くかかわったようである。この出版社はカテキズムや宗教絵葉書なども出版し、1969年には世界最大級のカトリック出版社の一つであるBayardに発展し今に至っている。

（3）スペイン版：オリジナルはドイツ版、リトグラフ手彩色のコンパクトな図版

スペイン版はもともと『Bilder=Bibel : Vierzig Kolorierte Darstellungen der Wichtigsten Begerenheiten des Alten und Neuen Testaments（図解聖書：旧約聖書と新約聖書の主要な出来事を描いた40点の彩色図版）』（Herdersche Verlagsbuchhandlung, [1861]）の綴じられていない40点の図版資料として出版されたもので、うち12点には旧約聖書、28点には新約聖書の場面が描かれ、図像の下部に小さくドイツ語で場面を表す言葉が記されている。この図版資料は11ヵ国語に展開されたようなので、カトリック文庫に所蔵するスペイン版はそのうちのひとつであろう。つまりスペイン版としているのは、もともとドイツで制作された図像の場面を表す言葉がスペイン語に訳されたものであり、本来はドイツ版とすべきものかもしれない。



Jesús bendice a los niños
（子供を祝福するイエス）

もともと手彩色のリトグラフ（石板画）による図像は、ドイツ版とスペイン版では施された色彩が異なっているためそれぞれ異なる印象を与えている。無彩

色版、彩色版、さらにはニス仕上げ版など様々な仕様で発行されたほか、形態もポスター版や製本されたものなど多岐にわたっているようである。

スペイン版は他の国のものに比べるとやや小さいサイズのポスター版で、全40点のうちの23点を所蔵している。イエス・キリストやその弟子たちなどの後頭部に施された黄色い色彩が印象的な図像で、下部にスペイン語で小さく場面を表す言葉が記されている。

・描画 HEINEMANN, Johann Nepomuk（1817–1902）について

前述の『Bilder=Bibel』には作者として「J.HEINEMANN」の名前が記されている。「J.HEINEMANN」は、リトグラファーで写真家の兄ヨハン・ネポムク・ハイネマン、画家の弟ヨセフ・ハイネマン（HEINEMANN, Josef, 1825-1901）の、ドイツで活躍したハイネマン兄弟のことであろう。この図像には兄のヨハン・ネポムク・ハイネマンのサインがあることから、彼が描いた原画をもとに、熟練の職人が石版をつくり刷り上げたリトグラフかと思われる。

・出版について

前述の『Bilder=Bibel』は、ドイツ・フライブルグにある出版社Verlag Herder（当時はHerdersche Verlagsbuchhandlung）で出版された。Verlag Herderはカトリック志向とローマ・カトリック教会との密接な関係に由来するドイツで最も古い出版社のひとつであり、現在も書籍・雑誌出版社として続いている。

（4.1）ドイツ版その1：ドイツ・オーストリアで半世紀以上子どもたちに愛されてきた図版

ドイツ版は3種あり、ひとつはオーストリアの画家フィリップ・シューマッハによる60点の図版である。

オーストリアのカトリック司祭、ヴィルヘルム・ピヒラー（PICHLER, Wilhelm, 1862-1938）はシューマッハの絵を挿絵に採用して『Katholische Religionsbüchlein（カトリックの小冊子）』（1931）を出版した。この本は『聖教の本』（新潟カトリック教會，1933）として、神言会のフーベルト・ライニルケンス神父（REINIRKENS, Hubert SVD., 1893-1976）により日本語に翻訳され、その後エンデルレ書店より出版されて版を重ねている。挿絵は多彩刷り、単色刷りなど版によって異なっているが、単色刷りの『聖教の本』（1950）の前書きには、「シュールハンメル（ママ）の七〇枚の挿絵は今度新しくオーストリアから送られた銅板を使用したものである。但しいろいろな関係から現在のオーストリア版と同じく色刷りにする事ができなかったのは、かへすがへすも残念な事である」とある。



［ノアの洪水］

ピヒラーの著作は多数の言語に翻訳されて版を重ね、半世紀以上にわたり子どもたちの宗教教育に寄与してきた。2024年に出版された新版にもシューマッハによる多彩刷りの挿絵が描かれている。

所蔵する図版は横長のものと縦長のものがあり軸装されている。図像の右下には出版年「1913」と出版社「Mosella-Verlag」が記されているが、場面を表す言葉などは見当たらない。左下には「PhS」と作者のサインが記され、No.1～60までの一連の番号が付されているので完結したシリーズであるようにも思えるがはっきりしない。図像には前述した『聖教の本』の挿絵と同一だと思われるもの、類似するものが多数含まれているので、シューマッハはこれをもとに新たに挿絵を描いたのかもしれない。

図版は挿絵と同様に、旧約聖書、新約聖書の場面が子どもたちにもよくわかるように明確に描かれており、七つの秘跡の場面も描かれていることから、カテキズムに沿って制作されたものであると言えよう。



[Wilhelm Pichler 原著] , ライニルケンス訳
『聖教の本 (改訂 21 版)』 (エンデルレ書店 , 1964)

・描画　SCHUMACHER, Phillipp (1866-1940) について

シューマッハは敬虔なカトリック教徒の家庭で育ち、ウィーンで絵画を学んだ後、イタリアやドイツで活動した。カトリック教会の祭壇画や十字架の道行きなどを描いたが現存していない作品も多い。また学校用聖書やカテキズムの挿絵、特にドイツのカトリック司祭、ヤコブ・エッカー (ECKER, Jakob, 1851-1912) の『Katholische Schulbibel (カトリック学校聖書)』の挿絵で広く知られるようになった。後半はミュンヘンでの美術協会活動を通じてカトリック教会の高位聖職者との繋がりを深めて活動し、グレゴリウス勲章騎士十字章を授与されている。

・出版について

出版社Mosella-Verlagは、1910年にドイツ・トリーアでエッカー版学校聖書『Eckerschen Schulbibe (カトリック学校聖書)』の監修を目的として設立された。この聖書は多くの言語に翻訳されて広く普及し、当時のドイツのカトリック教徒の半数がこの聖書を使って学んだと言われている。1933年にSchwann Verlagに買収された後1946年にPatmos Verlagに合併され、Verlagsgruppe Patomosグループとして現在に至っている。

(4.2) ドイツ版その2：暗い背景に悲しみや祈りの表情が描き出された図版

ドイツ版のもうひとつは、ドイツ・バイエルンにあるデッティンゲン・アム・マインのカトリック教会聖ペトロ・パウロ教区教会 (Pfarrkirche St. Peter und Paul (Dettingen am Main)) のWebページによれば、ゲプハルト・フーゲルが1908年から1932年にかけて制作した旧約聖書と新約聖書の場面の136点の絵画で、オリジナルは現在バイエルンのフライジング教区博物館 (Diözesanmuseum Freising) に収蔵されているとのことである。ドイツ・ミュンヘンの出版社Verlag Ars Sacra Josef Müllerがその作品のなかから100の場面をまとめて60×80cmのフォーマットで複製・出版した。販売された図版資料には旧約聖書の場面25点と新約聖書の場面75点が描かれており、後に図版資料に合わせて100のカテキズム (教理問答) がカトリック司祭カノニクス・ミニシュタラー (MINICHTHALER, Kanonikus Josef, 1860–1945) により執筆されて『Biblische Geschichte (聖書史)』として別に出版されている。カトリック文庫では軸装された形態でそのうちの37点を所蔵しており、掛図裏には場面を表す日本語が記された紙片が貼られて、軸棒には手書きで通し番号がふられている。若い番号には旧約聖書の場面が描かれたものが多いが、番号付けの意図は不明である。



[ノアの洪水]

図版には横長のものと縦長のもの、また作者のサインがあるものとないものがあり、下部には小さく出版社名と出版年が印刷されている。図像は総

じて暗く筆跡が残る画面で、人物の精神性が滲みでているように感じられる。

・描画 FUGEL, Gebhard（1863-1939）について

ゲプハルト・フーゲルはキリスト教のモチーフを専門とするドイツの画家で、1885年にミュンヘン美術協会の展覧会に出品した絵画作品「キリストは病人を癒す（Christus hilt Kranke）」で知られるようになった。その後ドイツ・キリスト教美術協会（DG：Deutsche Gesellschaft für christliche Kunst）の設立にかかわり、19世紀末から20世紀初頭にかけてキリスト教美術の刷新の最前線に立った人物として知られている。ドイツ、スイス、イタリア、オーストリアなどの教会のために多数の壁画や祭壇画を描いたが、戦乱で焼失した作品も多い。広く知られている現存の作品として、建築家との共同プロジェクト作品であるドイツ・バイエルンの巡礼地アルトエッティング（Altötting）にある建築、絵画、舞台美術の要素を組み合わせたパノラマ絵画「キリストの磔刑（Kreuzigung Christi）」がある。

・出版について

出版社Verlag Ars Sacra Josef Müllerは、1896年にヨゼフ・ミュラー（MÜLLER, Josef, 1872-1935)によってドイツ・ミュンヘンで設立され、宗教的な図版資料や神学書などを出版した。その後出版事業を継承した家族によりarsEditionに社名が改称され、児童書、ギフトブック、文房具などを扱う近代的な出版社として成長し、現在はスウェーデンのメディア事業を取り扱うBonnierグループに属している。

（4.3）ドイツ版その3：女性画家が描いた明快で色彩豊かな図版

ドイツ版の最後は、60×90cmのポスター型の図版85点を所蔵しており、その一部には、左下に『Künstlerische Biblische Wandbilder nach Gemälden von Mate Mink-Born（メイト・ミンク=ボーンの絵画に基づいた芸術的な聖書壁画）』とシリーズ名が印刷された小さな紙片が貼られている。図版には番号が付されており、所蔵するなかでは「146」の番号が最後であるが、ドイツの「Verzameling in beeld（コレクションの写真集）」のWebページでは、『Biblischen Anschauungsbilder von Mate Mink-Born für Kindergottesdienst, Schule und Haus（メイト・ミンク=ボーンによる子ども礼拝、学校、家庭向けの聖書に基づく図解教材）』というシリーズ名で同様の図版資料が151点掲載されていることから、それ以上の点数のシリーズではないかと思われる。

他の図版資料シリーズでは聖書の場面が旧約聖書と新約聖書に分かれて順に描かれている、あるいはカテキズムに沿っているのに対し、当シリーズは欠号が多いこともあって、どのような体系になっているのか定かではない。また図像の下部に記されている場面を表す言葉の有無や言語の種類、シリーズ名や出版社名の表記なども様々であり、ミンク=ボーンというひとりの画家によって描かれていること以外は一貫性がない。所蔵している資料に異版が混在している可能性もあるが、出版社名が紙片を貼って修正されているなど、出版が長期にわたるなかで様々な事情や混乱が生じたように推測される。



[子供を祝福するイエス]

図像の下部に記載された場面を表す言葉は、ドイツ語のみで表記されたもの、ドイツ語と英語のもの、ドイツ語・英語・オランダ語・フランス語・スペイン語の5か国語表記のもの、前述の5か国のうちのどれか1か国が欠けた4か国語表記のもの、記載がないものなど様々なパターンがある。出版社がWahler & Schwarz（Hermann Appelに後で訂正されたものも含む）のものについてはすべてドイツ語のみの表記で、出版社がHermann Appelになるとドイツ語以外でも記載されるようになったので、はじめはドイツ国内のみで販売されていたものが、出版社が変わりドイツ以外の国でも販売されるようになったことを示唆しているのではないだろうか。また出版社がWahler & Schwarzの図版には、左下に「Künstlerische Biblische Wandbilder nach Gemälden von Mate Mink-Born」と印刷された小さな紙が貼られているが、紙片の下には「Empfohlen durch den Reichsverband für Kindergottesdienst u Sonntagschule, Berlin（ベルリンの帝国児童礼拝・日曜学校連盟による推奨）」と印刷されており（貼られた紙が剥がれた図版で確認）、この図版資料シリーズは元々子ども向けの礼拝、学校教材として作成されたものだとわかる。出版社がHermann Appelになるとシリーズ名はなくなり、「Printed in Germany」のみが印刷されている。

・描画 MINK-BORN, Mate（1882-1969）について

所蔵している85点の図版のうち、サインのないNo.58を除き、すべてに作者メイト・ミンク=ボーンのサインが記されている。サインは「M.MINK-BORN」が基本であるが、図版の途中から（所蔵資料ではNo.39以降）、「M.MINK-BORN 33」のように、サインの後ろに数字の記載が見られるようになる。記載されている数字は、「29～40（34、35はなし）」と「1931」である。「1931」という表記があることから、2桁の数字もおそらく年号で、ミンク=ボーンが図版の原画を描いた年を記しているものと思われる。サインに付されている年号から1929年から1940年にかけて、あるいはそれ以上の年月をかけて制作されたものであろう。

ミンク=ボーンは主にキリスト教の宗教的モチーフを描いたドイツの女性画家で、その作品は色彩豊かで、服装や髪形などに現代的な要素を取り入れていたことで知られていたようであるが、今となっては当時の現代的な要素を見出すのは難しい。彼女の最も多作で成功を収めた時期は1920年代後半から1930年代にかけてと評されており、この図版資料シリーズの原画を描いた時期に重なっている。

・出版について

出版社は、当初Wahler&Sehwalzであったと思われる。ただし前述のとおり、図像の右下には「Druck and Verlag Kunstanstalt Wahler & Schwarz (inh. L. Messing & Sohn), Stuttgart」とプリントされたものを線で消し、「Hermann Appel Verlag」のスタンプで訂正、さらに、「Hermann Appel, Verlag, München 27, Laplacestr. 26」と下に加えたものが見られる。このことから、途中でWahler & SchwarzからHermann Appelに変わったことがわかる。Wahler & Schwarzはドイツ・シュトゥットガルトにある出版社兼印刷業者で、宗教や愛国心をテーマとした絵葉書などを発行していた。Hermann Appelは、図版に記載されている所在地（ミュンヘンのラプラス通り）に今はなく、詳細は不明である。Hermann Appelの表記は「Verlag Hermann Appel, Stuttgart」、「Copyright 1929 by Hermann Appel, Verlag, München」、「Hermann Appel, Verlag, München」などが混在している。出版社の所在地が移ったのか、ミュンヘンとシュトゥットガルトの2つの拠点があり、それぞれから出版されたものなのかは不明である。

（5）オランダ版：イラストレーターが大胆なタッチで描いた旧約聖書の図版

オランダ版は『Bellarminus Bijbelplaten（ベラルミヌス聖書挿絵）』という全60点の図版資料シリーズの旧約聖書部分30点を所蔵している。シリーズには、旧約聖書の他に新約聖書25点および使徒言行録5点の図版資料が含まれているが、それらは所蔵していない。オランダ・ユトレヒトにあるSt. Gregoriushuisより1952年頃に出版されており、各国版のなかでは比較的新しいものである。この図版には『TOELICHTING op de

Bellarminus-Bÿbelplaten（ベラルミヌス聖書挿絵に関する解説）』が別にあり、各図版資料の解説の他に、これをどのように活用するべきなのかといった説明やいわゆる読者からのお便りなども載せられている。解説によれば、神言会の本部があるオランダ・シュタイル（Style）の印刷所で印刷されていること、また多言語表記のうちマレー語の訳者として神言会のステファヌス・コポン・ケダ神父（Stephanus Kopong Keda SVD., 生没年不明）の名前があることから、オランダ版も神言会に所縁があるといえよう。なおシリーズ名に名が冠されているM. ベラルミヌス・モル（BELLARMINUS MOL, M., 生没年不明）神父、また協力者として、当時ナイメーヘン・カトリック大学の旧約聖書学教授で、後にユトレヒト大司教、枢機卿となったベルナルドゥス・ヨハネス・アルフリンク（ALFRINK, Bernardus Johannes, 1900-1987）の名が編集者として記されている。



Daarom verdreef Jahweh God
hem uit de tuin van Eden
（楽園追放）

図版は旧約聖書の創世記「天地創造」に始まり、エステル記までが30点にまとめられているが、そのうち3分の2以上は創世記および出エジプト記の場面が占めている。図像の下部には場面を表す言葉と聖書の出典が記されている。オランダは公用語であるオランダ語の他に多くの言語が話される多言語・多文化の国であり、オランダ語の他に、英語、ドイツ語、マレー語、エスペラント語、ラテン語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、フランス語の記述がみられる。図像は旧約聖書の場面が大胆に描かれている印象である。

・描画 HORSTHUIS, Ben（1918-1998）について

図版には作者のサインが記されている。ベン・ホルストハスはオランダのイラストレーターで、MeinemaやDe Banierなどのキリスト教出版社で働き、日曜学校教材、児童書や青少年向け書籍の表紙やイラストを手がけたことで知られている。また1946年に創刊されたオランダの総合日刊紙『Algemeen Dagblad』などに政治的な風刺画を寄稿したほか、新聞の挿絵、漫画作品なども残している。雑誌『De Gezinsgids』には隔週で塗り絵ページが特集された。旧約聖書の場面に表現されている生き生きとした動きのある描線は彼の特徴と言えるのではないだろうか。なお新約聖書と使徒言行録の図版はフランス・ファン・ノルデン(NOORDEN, Frans van, 1887-1961）が描画を手がけており、旧約聖書の作風とは全く異なっている。

・出版について

出版についての情報はない。

（6）アルゼンチン版：印象的なピンクがひときわ目を引く鮮やかな色彩が魅力の図版

アルゼンチン版は『Láminas Catequisticas（カテキズム用図版資料）』シリーズのうち196点の図版資料を所蔵している。おそらく全200点のシリーズであると思われるが、内4点（No.119,189,191,195）は欠落している。他の国と比べて総点数が多く、旧約聖書の天地創造の場面なども7日間7点にわたって描かれている。前半（No.1～100）が旧約聖書、後半（No.101～200）が新約聖書の場面である。図像の右下には小さく、



Jesús se hizo Niño por nuestro amor
（幼子イエス）

「Junta Arquidiocesana de la Doctrina Cristiana del Arzobispado de Buenos Aires.」と「≪Casa del Catequista≫ Matheu 128 - Buenos Aires.」とあることから、ブエノスアイレス大司教区とブエノスアイレスのマテウ市にあったカテキスタの家（Casa del Catequista）が出版に関わっていたようである。アルゼンチン版については情報がほとんどなく、ブエノスアイレス大司教区へ問い合わせているが、現時点で回答はない。

すべての図像の上部には、シリーズ名である『Láminas Catequistica』とNo.が記されており、下部には場面を表す言葉とその注解（No.2～7のみ）がスペイン語で記されている。図像により色は異なるものの、すべて同じデザインの美しい枠で聖書の場面の絵が囲まれている。全体に鮮やかでマットな色調で描かれており、なかでも幼いイエス・キリストが身に着けている衣服をはじめとするピンクの色彩が特に目を引く。これだけの点数をどのように使用していたのか気になるところだが、所蔵しているものには使われた痕跡があまりなく良好な状態が保たれている。



La Ultima Cena（最後の晩餐）

・描画について

図版によって作風が異なるため、複数の作者によって描かれているのではないかと推測される。作風は、①No.1～100：旧約聖書のすべての場面、②No.104, 106, 114～121：幼いイエスが描かれた場面、③No.101～103, 105, 107～113, 122～200：②以外の新約聖書の場面の3つに大別される。①と②にはサインは見当たらないが、③には「Dで囲ったM（またはML）ubiau.」の文字が記されており、作者のサインだと思われる。サインから推測できる名前で調査したが、今のところ特定できていない。



図版のサイン

・出版について

出版社Casa del Catequistaは、現在、図版に記載されている所在地（Matheu 128）にはない。メキシコに同一名称の組織が存在し、「カトリックの教理教育教材および伝道者への支援を専門とする出版社」であるが、2005年に創設されていることから関連はないのではないかと思われる。

(7) アメリカ版：様々な画家の作品を集めた4つのテーマの掛図

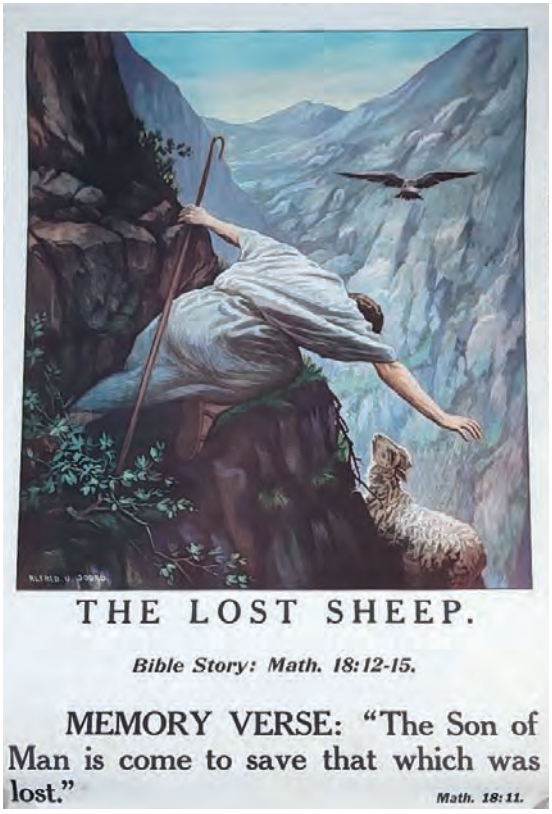
アメリカ版は13枚の図版が上部で綴じられた掛図（天綴じ・カレンダー型）の資料4点で、総枚数は52枚である。掛図の表紙となる1番上の図像の下部には、それぞれ「“Keeping alive the knowledge of promised redeemer”picture roll（約束された救い主についての知識を継承するの巻）」「“Life of Christ”picture roll（キリストの生涯の巻）」「“Christ establishes his church”picture roll（キリストが教会を設立するの巻）」「“The parables of our Lord”picture roll（我らの主のたとえ話の巻）」とタイトルが付されており、タイトルに沿った各13枚の図版が綴られている。

「“Keeping alive the knowledge of promised redeemer”picture roll」の12枚の図版には旧約聖書の場面が描かれているが、最後の1枚のみ新約聖書の救い主イエス・キリスト誕生の場面が描かれている。それ以外の3点の掛図の各13枚にはすべて新約聖書の場面が描かれている。また各図像の下部には場面を表す言葉の他、聖書の出典、暗唱聖句が記されている。

・描画について

図版は複数の作者によって描かれており、作風はそれぞれ異なっているが、掛図（天綴じ・カレンダー型）4点としての統一感は保たれている。またサインがあるものもないものもあり、すでに制作済みの図版を集めて同じ様式にして印刷されたものであろう。

例えば「“The parables of our Lord”picture roll」の13枚目『THE LOST SHEEP（迷える羊）』は、イギリスの画家アルフレッド・アッシャー・ソード（SOORD, Alfred Usher, 1868-1915）の作品のうちで最もよく知られたものである。急な崖の途中で立ち往生している羊と、崖の縁に身を投げかけて命をかけてそれを救う羊飼いを描いた本作は、1898年にイギリスのロイヤル・アカデミーで展示され、後にアメリカやイギリスで数多く複製されて100年以上経った現在でも人気のある作品である。



THE LOST SHEEP（迷える羊）

・出版について

出版者は、アメリカ・イリノイ州エフィンガムのカトリック教区である。主にカトリック教会において、出版物が教義に反する内容を含んでいないことを公式な検閲者が認める際に使用されるラテン語の「NIHIL OBSTAT（何も妨げるものはない）」および「IMPRIMATUR（印刷許可）」が記されている。印刷許可者「IMPRIMATUR : Jacobus A. Griffin, D.D., Bishop of Springfield in Illinois.」として記されているジェームズ・アロイジウス・グリフィン司教（GRIFFIN, James Aloysius, 1883-1948）は1924年から1948年までの間イリノイ州スプリングフィールド教区の司教であったことから、この資料もその期間中に出版されたものであると考えられる。

(8) 日本版：アメリカ版複製のなかで異彩を放つ図版 ―日本の子どもたちのなかに描かれたキリスト―

日本版は「資料紹介」に「日本版はアメリカ版の複製である」と述べられているとおり、アメリカ版と同じ画家の絵が使用されているが、アメリカ版よりも所蔵数が多く、アメリカ版にはない絵もある。また色の濃淡や人物の服装に細かな違いがあるものがあり、版が異なる絵を使用していると思われる。

図像の下部に場面を表す言葉、聖書の出典、暗唱聖句を表記する様式はアメリカ版と同じであるが、同じ絵

を使用していても引用された暗唱聖句などは異なっており、単なる複製ではなく日本版として改めて制作されたものである。4桁の番号が付されているが、それが何に基づく番号なのかは不明であり、総数もわからない。

また形態も掛図（天綴じ・カレンダー型）の資料3点、木板の両面あるいは片面に図版が貼られたもの、図版のみの一枚物など142点を所蔵しており、相当に使用されたものから比較的きれいに保存されているものまで状態も様々で日本版の全体像は全くわからない。掛図のひとつには、第二次世界大戦で家を失った人々の共同生活体でゼノ神父ことゼノ・ゼロフスキー修道士と奉仕する北原怜子を描いた「蟻の街のマリア」（1958年公開）の映画告知用ポスターも一緒に綴られている。



楽園追放の図版（日本版２点・アメリカ版）

日本版は制作された年代が異なる版違いの図版が存在している。例えば旧約聖書創世記第3章の楽園からの追放の場面を描いたものでは、以下のように年代にあわせて言葉遣いが異なっているのが興味深い。

■図像「アダムさんとエバさんが神様に背く」（創世記3.1-3.24）
暗唱聖句：コロサイ書三章二十節のことば「子たる者よ、凡てのことみな両親に順え、これ主の喜びたもう所なり」

■図像「アダムとエバが神にそむく」（創世記3.1-3.24）
コロサイ人への手紙3章20節の暗唱聖句「子たる者よ，　何事についても両親に従いなさい。これが主に喜ばれることである。」

ちなみにアメリカ版は以下のとおりである。

■図像「Paradise lost」（Bible story：Gen. 3:1-24.）
暗唱聖句「Memory verse:She shall crush thy head, and thou shalt lie in wait for her heel. Gen.3:15（彼女［彼］はお前の頭を踏みつけ、お前は彼女［彼］のかかとに噛みつく。創世記第3章15節）」

また日本版には聖書の引用のみならず、描かれた場面に関する詳細な注解が記載されている。アメリカ版にはない詳細な注解を加えることにより、日本版は初めて聖書に触れる人にもわかりやすいように言葉で絵を補足するようになっている。

・描画について

図版の絵はアメリカ版の複製であり、複数の作者によって描かれている。しかしながら複製ではなく日本版として描画されたと思われる「種まきのたとえ話」（作者不明）および「キリストは道である」（描画：P. Brannen）

の2点が含まれている。

「種まきのたとえ話」は教えを「（植物の）種」に、人間の心を「種を撒く土」にたとえ、土が良くなければ種は育たない、すなわち良い心を持っていなければ教えは響かないというたとえ話である。絵の上部に描かれた聖書から種が放射状に降り注ぎ、道ばたに落ちた種（鳥に食べられてしまう）、岩に落ちた種（根付かずに枯れてしまう）、いばらの間に落ちた種（根付いても実を結ばない）、よい土に落ちて稲穂に育ち実を結んだ種の4通りが描かれ、日本語そのものが絵のなかに取り込まれている。また「イエス様は、よくたとえ話を使ってたいせつなことをお教えになりました。（中略）どうしたらみことばの種をまいていただけるでしょうか」と記載されており、場面の説明だけでなくカテキズム的な問答における「問い」が投げかけられているのも特徴的である。

「キリストは道である」の絵は、「資料紹介」に「大きな松の木を背景に足元に白い肩掛けカバンをおいた学生服姿の中学生、赤ん坊を背負って子守りをするおかっぱ頭の少女、虫籠を手にした下駄履きの少年などがキリストを囲んでいる構図である」「1950年代頃の典型的な日本の風俗が取り込まれている。しかし、キリストの風貌はあくまでも西洋風に描かれている」と記載されており、この絵はアメリカ版の複製のなかにあって異彩を放っている。1956年に開催された第6回基督教教育週間（9月16日～23日）の標語が「キリストは道である」であるのと何か関係があるのだろうか。また作者P. Brannenについても詳細を知ることはできなかった。



種まきのたとえ話



キリストは道である

・出版について

出版社は、東京の日本日曜学校協会で、1950年から60年代にかけて出版したようである。同協会は1907年に創立し、それまで全国各地で開かれていた日曜学校を合同組織として統合したものである。1941年に一度解散したが、1946年に再結成され、現在は日本キリスト教協議会（NNC : National Christian Council in Japan）の教育部として継続している。

戦後日本のキリスト教布教においては教会教育が活性化し、外国からの講師の招待や教案の整備、多数の教育雑誌の創刊などが行われた。1951年からは先述の「基督教教育週間」が設定され、講演会や生徒大会が催されている。日本版はこうした盛り上がりのなかで制作されたのではないだろうか。

3. 要理教育（カテケーシス）と聖書と「図版」について

ここまで各国の「布教用要理解説図版」を個別に概観してきたが、せっかく8か国も揃っているので、ここでは各国の歴史や文化以外の比較要素を探ってみたい。さて、キリスト教美術や要理など専門的な知識のない私たちは時間をつくって1点ずつ眺めてみたところ、素朴ではあるが意外な気づきがあった。当初は1点1点に要理の含意があるだろうと踏んでいたところ、そうではなく、聖書の一場面を解説しているにすぎないものが多数存在した。もちろん聖書の場面々々には何らかのキリスト教の教えが含まれているのだろうし、要理を人々に伝えるべく絵画で表現している点でタイトルに相違はないのだが、少なくとも要理を直接的に図像で解説しているようには思えなかったのである。自分たちで名付けておいて勝手だが、恐らく多くの方がこのタイトルから想像されるのと、実際に各国の「図版」をひとつずつ閲覧して持たれる印象とでは、随分異なるのではないだろうか。

ここからは、やや遠回りになるが、要理の教育・教授法に話を移してみたい。そのように思わせてくれたのは、「2.(4.1) ドイツ版その1」で紹介したピヒラー著；ライニルケンス訳『聖教の本』の訳者による「序」（改訂版、昭和38年3月15日付より）の記述である。本書の内容は子ども向けであるが、「序」に限ってはどう見ても大人向け、とりわけ教育・教授者向けと考えられる。長くはなるが大変示唆に富むので少し丁寧に引用しておこう。

この本の教理解説法は、いわゆる歴史的教授法である。つまり聖歴史の順序にしたがって、教理をわかり易く説明したもので、この方法はすでに聖アウグスチノが「De catechizandis rudibus」＊）の中で、最もよい宗教の教えかたとしてすすめているものであって、その後も多数の教師が用いて、大きな成果をあげている方法である。ヨーロッパでは「カトリック要理」によって教理を教えるやりかたは、小学校三年生以下の子供に対してはもうほとんど行なわれてはいない。

言うまでもなく、カトリックの教理と救世の歴史とは切離すことはできない。たとえば「神の全能」ということも、神自身の直接の啓示とともに、天地の創造や奇跡などという歴史的事実を通じても示されている。従ってこの歴史的教授法によれば、旧新約時代の歴史的事実やいましめを根本として教理が説明されるから、子供にとっては、抽象的な教理教授法よりも理解し味得しやすく、その上、宗教上の知識も深くなるわけである。（中略）

もちろん、宗教は史実を教えることにばかり偏ってはならないが、原著者は、その点をも十分に考慮している。その構成を具体的に言うなら、小著「少年聖書」を縦糸とし「カトリック」要理を横糸として織り出したものであって、おもな目的は、少年少女の日常生活をキリスト教的に導くにあり、ことに「祈り」については特別に意を用いてしるされてある。

この訳書はまた、少年少女のためばかりでなく、大人の初歩の教理の勉強のためにも有益である。抽象的な宗教理論よりも、むしろこういう解説によるほうが、宗教に入り易い場合が非常に多い。

＊聖アウグスチヌスとも呼ばれ、『要理講話』あるいは『教えの手ほどき』や『初心者の教導について』などとも訳される要理の理論と実践に係る代表作。（本注は筆者による）

この記述は、要理そのものだけでなく、「要理教育」というひとつの視点を提示してくれることとなった。訳者のライニルケンス神父の説明に沿えば、西洋において特に小学校低学年までは、要理を直接教えるよりは聖書上の歴史記述に基づいて要理を伝える方がこの時点では主流だったということになる。また、対象が大人であっても要理学習の初心者にとっては、歴史記述に重きを置けばより理解が進むと考えられていることになる。そうであれば、図像においても同じことが言えないだろうか。つまり、どちらかといえば要理を直接解説する用途で描かれた図像に対して、聖書に書かれた歴史を援用して要理を伝授することを意図して描かれた図像が相当数あるのではないだろうか。さらには、それぞれの図像が何々型などと類型化はできないまでも、歴史記述に置かれた比重の軽重や強弱により各国版の特徴の一端が垣間見えるのではないだろうか。ライ

ニルケンス神父の比喩を借りれば、聖書の歴史記述を縦糸とし要理を横糸として描かれた図像は、その糸の太さによって個性が表れていると換言できるかもしれない。

では、キリスト教の教えを教授するに際し、「歴史的教授法」が採られることになったのはいつ頃からだろうか。手始めに、上述のピヒラーについて、『キリスト教人名辞典』(日本基督教団出版局, 1986)より紹介すれば、「教理問答分野での功労者」であり、「司牧的配慮と聖書を基本にした教理問答授業の先駆者」とのことである。「1903年からウィーンで教理問答の実践に取り組」んだものの、「当時の宗教教育の空虚さと形式主義を痛感」し、「その形式と方法論の改革に着手し」たそうである。その後は、実兄のヨハン・ピヒラー(PICHLER, Johann, 1860-1927)やヨハン・グスタフ・マイ(MEY, Johann Gustav, 1822-1877)ら数人の同志たちと相互に影響を与えながら、「聖書、教理、典礼が一体となった新しいカリキュラムの創成を進め、その土台としての聖書を重視した」という。

さらにもう少し、『新カトリック大事典』などをもとに、歴史的な流れのなかでの要理教育の位置付けをおさえておきたい。古代においては、2〜3世紀以降、もともと成人の洗礼志願者を入信に向けて準備させるためのものであったらしい。入信準備はいくつかの段階に分かれ、信仰の理解度に応じるものであり、主イエス・キリストとその教えとともに秘跡・典礼の伝授が重要視された。これが4〜5世紀になると、成人の入信から幼児への洗礼が多数になるという状況変化に伴い、要理教育は洗礼前の教育から洗礼後の信仰教育へと移行し、聖書や典礼を重視した内容よりもキリスト教的環境を基礎にした人間形成教育へと変わっていった。そこでの要理教育は、両親や代父母が受洗した子どもに伝えるべき信仰の初歩的教育を意味し、ミサでの説教や講話も道徳的なものに重きが置かれることとなった。特に主要な祈りの言葉や教理定型文の暗唱が重視された。一方、この頃には、巡礼、演劇、聖歌、聖画像などを利用した教育方法がより影響力をもつと考えられるようになっていった。

しかし、中世においては、時間の経過とともに信徒への効果的な教育の衰退や欠如から秘跡の実践の点で緩慢となり、法的に規制すべきと考えられるようになった。そこで、1215年の第四ラテラノ公会議では、分別のつく年齢に達した信者の義務として、告解(ゆるしの秘跡)と聖体拝領を少なくとも年1回行うべきことが規定された。これにより、当時の教会指導者は教育の有効な手段を探す必要に迫られ、それが問答形式で書かれた教材や手引書など後年の教理問答書・要理書へとつながっていく。

さらに近世においては、16世紀に教理問答書・要理書が登場し、特に1545-1563年に開催されたトリエント公会議以降は台頭するプロテスタントに対抗する意識も手伝って、カトリックとして教義を明確化し、教会の組織や規律を立て直す動きとなった。これに呼応するかのように、信条、十戒、秘跡と祈りを主な内容としつつも、子どもに対して問答体の要理書をひたすら暗記させることに重きが置かれることになっていった。

こうした状況において19世紀末から20世紀初めにかけて登場したのがピヒラーたちの要理教育刷新運動であった。難解な文章を丸暗記させる従来の要理教育に疑問を感じた彼らは、当時の進取的な教育学・心理学の要素を取り入れ、子どもの発達や心理に合わせることとした。謂わば暗記重視から理解と主体性重視への転換であった。具体的には、まずは、①抽象的な要理からではなく、イエスの生涯や聖書の物語を子どもたちの直観に訴え、続いて、②聖書の物語、歴史を理解させたあとで要理の解説へと導き、そして最後に、③学んだことを日常生活や日々の祈りにどのように活かすかを考えさせる、という展開である。このうち特に①の「直観に訴える」点において図版資料が有効に働いたことは想像に難くない。大変大きなまさに歴史的転換期であったといえるだろう。

さらに、1962-1965年に開催された第二ヴァチカン公会議では要理教育も見直され、それまでは子どもと洗礼志願者だけが対象とされてきたが、それ以外の成人も要理を進んで学ばなければならないとされた。そして要理教育は、要理を日々の生活に落とし込み、人間としてどう生きるか、あるいは現代社会の課題と信仰をどのように結びつけるか、といった取り組み方へと発展していった。

改めて、所蔵している「図版」の出版年は不明な場合もあるものの、いずれも1900年代と比較的新しいものゆえ、ピヒラーらの影響をすでにある程度は受けたものかとも思われる。しかし、元の絵画はそれより前に描かれた場合もあり、その影響の度合いは成立年代と地域により様々であろうから、その影響度が各国版の個性として見出されても不思議ではないのではないだろうか。もちろん、各国の歴史や文化がそのまま反映されている側面も大きいだろうし、そうした比較研究もなされてしかるべきだろう。しかしながら、「図版」がそもそも要理教育の補助教材としての役割であることを踏まえれば、要理教育とその方法の観点から「図版」に光を当てるのも悪くないのではと考えている。繰り返しになるが、幸いにして8か国もの「図版」が揃っている。これらを利用した要理教育とその歴史の視点からも各国版の比較研究が手掛けられることを期待している。

おわりに

カテキズムは、16世紀半ばのトリエント公会議後に通称「ローマ・カテキズム」として世に出され、以来400年以上の長きにわたり使用された。第二ヴァチカン公会議の準備段階においても普遍的な要理書の問題は提起されたものの改革には至らなかった。それが同公会議閉会20年の節目となる1985年、臨時世界代表司教会議（シノドス）が開催され、時の教皇ヨハネ・パウロ二世に対して、信仰と道徳に係るすべてのカトリック教理についての概説書の作成を要望したところから事が動き始める。教皇はこれに応え、翌年、当時の教皇庁教理省長官であるヨゼフ・ラッツィンガー枢機卿（後の教皇ベネディクト十六世）を責任者とする12名の枢機卿と司教に、カテキズムの草案作成の任に当たらせたのである。そして教皇への要請から7年の月日を経てようやく『Catechismus Catholicae Ecclesiae（カトリック教会のカテキズム）』が完成。1992年に最初にフランス語版が出され、ドイツ語版（1993年）、英語版（1994年）などが出された後、多くの訂正が加えられラテン語の規範版が1997年に発行された。これが日本語に翻訳され、2002年にカトリック中央協議会から出版されて今に至っている。

しかし、『カトリック教会のカテキズム』はあくまでも「規範版」あるいは「参考書」としての位置付けであり、各国で作成されるカテキズムまたは概説書を否定したわけではない。むしろ、多様な人々それぞれに適した、それぞれの地域で作成されるべき要理書の基準とし、各地域での解説と教授法のための手引きとなることが望まれた。

翻って「図版」は要理を人々に易しく伝えるための副教材的存在であった。他方、カトリック文庫所蔵の「図版」は現行のカテキズム以前に描かれたものだと思われる。そうであれば、「図版」と旧カテキズムとの親和性はもとより、現行カテキズムとの距離感も研究対象になるのではないだろうか。いずれにせよ、「図版」にひとりでも多くの研究者が関心を寄せてくださることを願っている。

なお、本稿執筆に際し、様々な方法と媒体で文献に当たり調査してきたのだが、国によって情報量の多寡はまちまちであり、自ずと各国版記事の精粗に差が出ることとなった。また、情報の裏付けをなおざりにしたつもりはないが、絶対量が少ないなかでの情報収集であったため、まずは入手情報の共有に努めた。その点、今後の研究の足掛かりとしてのものと、ご留意いただければ幸いである。

レオナルド・ダ・ヴィンチの『最後の晩餐』やブリューゲルの『バベルの塔』など、著名な画家たちが聖書の場面やキリスト教の教えなどを題材に数多くの名画を描いてきた。しかし、ここで取り上げた「図版」はそのような芸術作品とは一線を画すものである。無名の画家たちによって描かれ、印刷・量産されて多くの人々の手にわたり、眺められ、時には子どもたちによって触られたり汚されたりすることもあったに違いない。しかしながら、描かれた国や経緯は異なっていても、キリストの教えをひとりでも多くの人々に伝えるという強い思いはひとつであったはずである。長い年月を経て、このような図版資料が、今を生きる人々にとってどのような意味を持つのかも大変興味深いものがある。

【参考・引用文献】

●論文･記事

＜2-1.中国版 / 2-8.日本版＞

･「布教用要理解説図版について」山辺美津香（カトリコス）10, p.2-5, 1998.7

･「資料紹介：布教用要理解説図版（王粛達画 北京輔仁大学1939年刊）について」山辺美津香, 栗山義久（南山大学図書館紀要）6, p.7-34, 1999.5

＜2-2.フランス＞

･Saint-Martin, Isabelle（2023）. L'Arme de l'image : du Grand Catéchisme aux projections lumineuses et premiers films de la Bonne Presse. *De la Bonne Presse à Bayard : 150 ans d'histoire d'un groupe de presse et d'édition catholique (1873-2023)*, pp.73-100. Retrieved July 17, 2026, from https://-books.openedition.org/larhra/11733

＜2-3.スペイン版＞

･Assel, Jutta（2006）. Deutsche Bilderbibeln im 19. Jahrhundert : insbesondere nazarenische Bilderfolgen zum Alten und / oder Neuen Testament. *Julius Schnorr von Carolsfeld : die Bibel in Bildern und andere biblische Bilderfolgen der Nazarener*, pp.24-42. DOI:https://doi.org/10.11588/artdok.00007496

＜2-4.1.ドイツ版＞

･Feiler, B.（1999）. Schumacher, Philipp. In *Österreichisches Biographisches Lexikon.1815-1950, Bd.11*（Lfg. 54）, pp.362-363. DOI:10.1553/0x00284716

●資料

＜2-2.フランス版＞

･ドルワル､ド､レゼイ『公教圖解』（三才社, 1901）

･ワグネル譯『公教要理圖解』（ペ･マルモニエ, 1913）（https://lab.ndl.go.jp/dl/book/907365）

･永田辰之助編『公教要理圖解』（天主公教會, 1927）

･*Toelichting op de Bellarminus-Bijbelplaten*. St.-Gregoriushuis, 1952

･『神言修道会来日若周年記念誌（1907年～2007年）』（神言修道会日本管区長永山誠, 2015）

･酒井香織『1950年聖年の日本人画家たち：宣教美術展：日本における現地の表現方法による宗教美術運動』（Bibliografica giuridica Ciampi, 2025）

･*Le Catéchisme en Images 1893*.（[3e édition revue et corrigée]）. Catholicart, 2025

＜2-3.スペイン版＞

･Heinemann, J.（Lithographien）, Schuster, J.（Textbeilage）. *Bilder=Bibel : Vierzig Kolorierte Darstellungen der Wichtigsten Begerenheiten des Alten und Neuen Testaments*. Herdersche Verlagshandlung, [1861]

＜2-4.1.ドイツ版＞

･[ウイルヘルム・ピヒラー著], ライニルケンス訳『聖教の本』（新潟カトリック教會, 1933）

･[Wilhelm Pichler原著], ライニルケンス訳『聖教の本』（3版）（エンデルレ書店, 1950）

･[Wilhelm Pichler原著], ライニルケンス訳『聖教の本：子供のための教理讀本』（改訂版）（エンデルレ書店, 1952）

·[Wilhelm Pichler原著], ライニルケンス訳『聖教の本：初歩の教理読本』(改訂16版)(エンデルレ書店, 1956)
·[Wilhelm Pichler原著], ライニルケンス訳『聖教の本：初歩の教理読本』(改訂21版)(エンデルレ書店, 1964)



『聖教の本』各版



『聖教の本』改訂版より
昭和38年3月15日付の「序」

＜2-8.日本版＞
·NCC教育部歴史編纂委員会編『教会教育の歩み：日曜学校から始まるキリスト教教育史』(教文館, 2007)

＜3.要理教育·聖書·図版 / おわりに＞
·『新カトリック大事典』(研究社, 随時更新オンライン版)
·Encyclopedia.com(https://www.encyclopedia.com)(参照 2026-09-02)
·『キリスト教人名辞典』(日本基督教団出版局, 1986)

(石田 昌久、加藤 富美、伊藤 禄美、栗山 章吾、神立 真美子)

「カトリック文庫」

「カトリック文庫」では、近代日本におけるキリスト教史の研究に資する資料群の構築を目的として、明治·大正·昭和初期のキリスト教関係出版物等を収集しています。これまで、聖書、祈祷書、聖歌集、要理書およびそれらの解説書、布教資料、聖人伝などを、多くの皆さまからご寄贈いただきました。この場を借りて、心よりお礼を申し上げます。また、従来からの資料に加えまして、お手元に教会·修道会史資料(教会·修道会刊行物)などがございましたら、引き続きご寄贈を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

南山大学ライネルス中央図書館カトリック文庫通信
カトリコス　No.41　2026.11.1発行
編集・発行：カトリック文庫グループ
〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18　　Phone : 052(832)3163 / Fax : 052(832)3462
＊図書館Webページでもご覧いただけます。
https://office.nanzan-.ac.jp/library/catholicbunko/